

- 本県の酒米用品種「山田錦」「神力」は収量性が低く、同「レイホウ」は今後安定的な種子供給が見込めないことから、これらに替わる**新品種の導入による酒米の安定生産が課題**。
- このため、平成27年に新たに奨励品種に採用された**酒米新品種「華錦」の普及拡大と栽培技術の確立**に取り組んだ。
- その結果、平成28年は15haで47.730kgの「華錦」が生産され、醸造メーカー9社で日本酒として製品化された。

具体的な成果

普及指導員の活動

1 生産拡大と収量安定化

- 新たに「華錦」の栽培に取り組む生産者を対象に現地調査及び検討会を実施し、生産拡大と収量安定化に向けた支援を実施。
- ・「華錦」栽培面積
H26 0 → H28 15ha
- ・「華錦」生産量
H26 0 → H28 47,730kg
- ・「華錦」使用酒造メーカー
H26 0 → H28 9社

2 栽培マニュアルの作成と実需者への情報提供

- 試験研究機関と連携し、現地調査の結果等を参考に「華錦栽培マニュアル」を作成、配布(200部)。
- 生産者、実需者ともに「華錦」の特性等を理解したうえで高品質の清酒の醸造につなげるため、合同で現地検討会及び成績検討会を開催。
- 「華錦」栽培ほ場に水田センサーを設置し、「華錦」登熟期間中の気温及び水位を調査。収穫した玄米の品質及び醸造適性との関連について、実需者と意見交換を実施。
(具体的データ)

平均気温 平均水位

熊本市	24.0℃	3.9cm
山都町	22.2℃	0.7cm

平成27年

- 普及指導センターの呼びかけで、県下2か所に**展示ほを設置**。
- 展示ほの生育調査・収量調査を実施。
- 関係機関とともに現地指導を実施。

平成28年

- 普及指導センターの呼びかけで、引き続き県下2か所に**展示ほを設置**。
- 展示ほの生育調査・収量調査を引き続き実施。さらに、出穂後に水田センサーを設置し、登熟期間中の気温及び水位を調査。
- 関係機関とともに現地指導を実施。



普及指導員だからできたこと

・ 初めて導入する品種であったが、水稻の専門技術を有する普及指導員が試験研究機関と連携しながら指導したことにより、**新品種のスムーズな導入と生産拡大が可能となった**。

・ 品種を開発した試験研究機関と農業者を結びつけただけでなく、集荷販売にあたるJA、実需者である酒造メーカーも巻き込んで**新品種を核とした酒米産地の活性化の取組を進めることができた**。

県育成酒米新品種「華錦」の生産振興

活動期間：平成27～28年度

1. 取組の背景

本県では酒米用品種として山田錦、神力、レイホウ等が栽培されているが、山田錦及び神力は栽培が難しく収量が上がらないという欠点があり、一方レイホウは収量性があるものの将来にわたっての種子の安定供給に不安があるため、現状のままでは酒米そのものの安定供給が危惧される状況であった。

一方、熊本県農業研究センターでは、従来品種よりも栽培特性の優れた酒米品種の育成に取り組み、平成27年に新品種「華錦（熊本酒60号）」を開発した。

そこで、レイホウに替えて新品種「華錦」を導入することにより、酒米の安定供給を目指すとともに、県オリジナル品種を原料とした特徴ある清酒づくりにつなげるための取り組みを行うことになった。

2. 活動内容（詳細）

①平成27年

- ・平坦地（熊本市）、中山間地（山都町）に各1カ所ずつ展示ほを設置。
- ・展示ほにおいて茎数等の生育調査及び収量調査を実施。
- ・出穂期（9月）の現地検討会を実施（酒造組合含む31人出席）。
- ・展示ほ成績検討会を実施（酒造組合含む32人出席）。
- ・展示ほ成績等を元に「華錦栽培マニュアル」200部を作成、普及センター、JA等関係機関に配布。

②平成28年

- ・平坦地（熊本市）、中山間地（山都町）に引き続き展示ほを設置。
- ・展示ほにおいて引き続き生育調査及び収量調査を実施。
- ・展示ほに水田センサーを設置し、登熟期間中の水位、気温、水温等を調査。
- ・展示ほの調査結果を酒造組合に提供し、意見交換を実施。

3. 具体的な成果（詳細）

①華錦の生産状況

	(H26)	(H27)	(H28)
栽培面積 (ha)	0	8.5	15.6
生産量 (kg)	0	42,720	47,730
取扱メーカー (社)	0	8	9

②水田センサー調査結果概要（出穂期～収穫期）

	(平均気温)	(平均水位)
熊本市	24.0℃	3.9cm
山都	22.2℃	0.7cm

4. 農家等からの評価・コメント（熊本県酒造組合 緒方専務理事）

県内の酒造メーカーは出自の確かな地元産の原料米を使いたいという希望が強いので、ぜひ今後も「華錦」の生産を拡大していただきたい。品質面では大きな問題はないが、心白の流れ（とう精時の割れ）が一部にみられるので、改善をお願いしたい。

5. 普及指導員のコメント（県央広域本部農業普及・振興課 参事 井手眞一）

「華錦」の産地化を目指して収量安定、品質向上に取り組んでいる。現在の作付は熊本市の一部にとどまっているが、他の地域からも問い合わせがあり、生産者の関心も高いと感じる。今後は栽培マニュアルを地域に合わせて改訂し、関係機関とも情報を共有しながらさらに収量・品質の向上に努めていきたい。

6. 現状・今後の展開等

平成30年の米の生産数量目標配分の廃止を踏まえ、本県においても、非主食用米を含めた実需者ニーズに対応した多様な米づくりに取り組んでいるところであり、「華錦」の生産拡大もその一環として位置づけて取り組んでいる。

本県の日本酒生産量はそれほど大きくはないため、酒米の需要そのものは限定的ではあるが、県オリジナルの酒米品種を原料としたオリジナルブランドの日本酒づくりと言うストーリーを共有しながら、関係機関が一丸となって今後も「華錦」の安定供給に努めていきたい。